平成24年度 学習院大学史料館特別展
学習院大学文学部教育学科開設準備室共催

「近代日本の学びの風景 －学校文化の源流 －」展の開催にあたって

学習院大学教授・文学部教育学科開設準備委員
斉藤利彦

近代日本の学校の学びの風景とは、おそらく多くの人にとって、黒板を背にした教師が教壇に立ち、教室のすべての生徒が皆教師の方を向いて授業を受けるというものではないだろうか。確かにそれは、1872（明治５年）の「学制」発布以来、一貫して導入された「一斉教授」の授業の風景であった。それは、いくぶん形態を変えながらも、今日まで続く主要な授業のスタイルである。

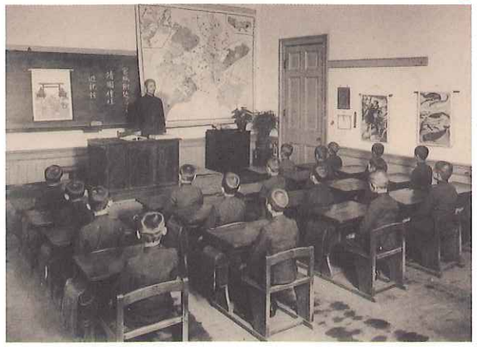
しかし、心の目を凝らしてさらに思い出をたどれば、そこには学びの風景をより具体的に彩る多くのものがあったはずである。例えば、生徒たちが座って勉強していた机や椅子、その机の横にはランドセルが掛けてあったかもしれない。学校での机と椅子は、通常は二人用または三人用のものであったが、あえて一人用を備える学習院初等科のような例もあった。そして、机の上には、教科書やノート、鉛筆や筆箱がおいてあったのではないだろうか。小学校の教室にノート（雑記帳）や鉛筆が普及するのは、洋更紙が安価となり、国内で鉛筆の大量生産が可能となった、第一次世界大戦以降のことである。

また、教室には時間割や掛図が掲げられ、授業によっては天体儀や白地図、そして様々な標本等の多様な教材や教具が用いられていたであろう。この時間割は、個別学習を基本とする近世の寺子屋では見られなかったものであり、多くの教科を効率的に生徒たちに学習させる近代学校ゆえにあみ出された授業の計画表であった。また掛図は、国定教科書が導入される1904（明治37）年以前には、すべての生徒が一同に観覧できる主要な教材としての役割を持っていた。

そして、学習が一定進んで区切りの段階になると試験が行われ、学年の末には成績表が配られ、修業証書や卒業証書が授与されていたはずだ。この試験という制度は、先述の「学制」が「生徒及試業ノ事」と定めていたことからも分かるように、日本の近代学校が登場した当初から実施されていたものであった。「生徒階級を踏む極めて厳ならしむ」「毫も姑息の進級をせしむべからず」（「学制着手順序」）と定められ、1900（明治33）年の小学校令施行規則の制定までは、小学校においても進級試験と卒業試験が厳密に行われていた。

そして学校行事もまた、学びの風景の一つと数えられるだろう。運動会や修学旅行、夏休みの楽しさも思い出される。夏休みの宿題を、やっと仕上げた体験もあったろう。運動会は、近隣の人びとが集う、地域の祭りでもあった。修学旅行は、当初は男子が軍隊の「行軍」を真似て行う徒歩の旅行として始まった。明治30年代の鉄道の発達とともに、女学校でも実施されるようになり、史蹟の探訪や名跡の学習を目的とする「学術研究」の役割も合わせ持つようになっていく。

以上に述べてきたすべてが、学びの風景として存在し、あるいは逆に、学ぶという行為そのものが、それらによって支えられていたといえるだろう。ここでは、学びの空間である学校という固有の風景を彩る様々のもの、学校という空間の中での生徒たちの行動の様式、それらを「学校文化」という表現でとらえてみたい。この企画は、そうした意図を持って創り出されたものである。

同時に、生徒たちは、単に学ぶというだけの存在ではない。生徒たち自身が様々なものを創り出し、表現していたということも忘れてはならないだろう。それらが集約されている一つの形式が、『校友会誌』である。そこには、生徒たちの学びの成果ともいえる作文や創作の多様な作品や、自主的な運動部や文芸部の日常的な活動が表現されている。まさに「学校文化」の華ともいえる貴重な記録である。こうした多様な学びの風景を一同に集め陳列して、近代日本の学校の学びの風景の一コマを伝えようとするのが、この企画である。

❷ 尋常小学校教科書　大正～昭和初期　個人蔵
❸ 学習院初等学科机腰掛　明治期　学習院初等科蔵
❹ 地理授業（初等学科第四年級南組）「大礼奉献学習院写真」
学習院大学史料館蔵
❺ 平田義温　夏休宿題　大正13年、
同　富士山の研究　大正15年　学習院大学史料館蔵 三島家資料
❻ 学習院初等学科運動会写真
大正２年10月19日　学習院大学史料館蔵　高松宮家資料
❼ 愛知県瀬戸市道泉尋常小学校賞状
昭和５年３月22日発行　学習院大学教職課程研究室蔵
❽ 校友会雑誌　明治20年代～昭和初期　学習院大学教職課程研究室蔵